

結果発表！

37人の音楽評論家が選ぶ

「絶対に聴くべきアーティスト」

首位はヴァイオリニスト、イザベル・ファウスト

第2位は日本の若きマエストロ、山田和樹

毎年恒例「コンサート・ベストテン」の執筆陣を中心とした音楽評論家37名に聞くアンケート「絶対に聴くべきアーティスト」。獲得票3票までの結果一覧をご紹介します。

※2票獲得の結果一覧はp113をご覧ください。

■アンケート内容
「絶対に聴くべき」と思うアーティストの選出。

■選出条件

「クラシック音楽のアーティストであること」

「存命のアーティストであること(2016年3月9日時点)」

「音楽評論家自身がコンサート等、生で聴いたことがあること」

「音楽評論家自身がコンサート等、生で聴いたことがあること」

「音楽評論家自身がコンサート等、生で聴いたことがあること」

「音楽評論家自身がコンサート等、生で聴いたことがあること」

「音楽評論家自身がコンサート等、生で聴いたことがあること」

以上3つの項目を満たしていること。パート(指揮・楽器・作曲等)、年齢、国籍不問。

■選出人数
20人以上で選出のこと。20人以上であれば人数自由(0人、5人等可)。順位付けはなし。

■グループについて
8人以下で編成される室内楽グループは可。1グループにつき1名とカウントする。

谷戸基岩 Motoiwa Yato ■音楽評論家

主催コンサートに登場してほしいアーティスト

「地球規模で考え地域的に行動する」。音楽評論家が責任を持つべきは何よりも自国の音楽シーンという持論なので日本で活躍している人に限定。またマスコミにも十分に取り上げられていると私が考える小山実稚恵、大谷康子、小林美恵、江口玲らは除外した。伴奏で活躍しているピアニストが多いのはどんなに弦・管楽器奏者が優れていてもピアノで台無しというケースが余りにも目立つから。金木博幸の室内楽で鍛えられたピアニストが多いのは決して偶然ではない。また業界は野原、加藤のような安請け合いしないストイックな姿勢にも理解を示す必要がある。さらに佐藤のように抜群の才能ながら諸般の事情で長らく休業していたアーティストも要チェックだ。とにかく自分の主催コンサートに登場して欲しいような人々を挙げた。業界の都合によるアーティスト評価に従うのではなく、書き手個人の責任が込められないとクラシック音楽業界は政治家の世界と同レベルのものになってしまうことだろう。

- 内門卓也 (p)
- 加藤洋之 (p)
- 岸本雅美 (p)
- 栗田奈々子 (p)
- 佐藤美香 (p)
- 佐野隆哉 (p)
- 實川風 (p)
- 野原みどり (p)
- 広瀬悦子 (p)
- 前田拓郎 (p)
- 松本望 (p)
- 山田武彦 (p)
- 鷺宮美幸 (p)
- 長尾春花 (vn)
- 上森祥平 (vc)
- 江口心一 (vc)
- 上田希 (cl)
- 景山梨乃 (hp)
- 高野麗音 (hp)
- 吉川真澄 (S)

山田真一 Shinichi Yamada ■音楽評論家

大きな変化を遂げ、磨き掛かったピアノズム

最近、聴いている中から5名を挙げた。

いずれも、それぞれの分野で他のアーティストには真似できない独自の音楽性が光る。

ペライアはそろそろ70歳になろうとしている。その間に、大きな変化を遂げ、ピアノズムに磨きが掛かってきた。これは口で言うほど簡単ではなく、デビューして20年も過ぎれば、迷いも生じれば、活動に浮き沈みもできるものだが、そのようなものを廃して、愚直にピアノ・ソロを中心に活動してきた姿勢は称賛に値する。是非、他のアーティストも見習って欲しい。

プレトニョフはピアノ演奏に関して推した。

今では、自ら創立したロシア・ナショナル管弦楽団を始めとする指揮が主要な活動になっているが、やはりピアノでの音楽性は代えがたい魅力を今でも持ち続けている。ぜひ、ピアノ独奏の機会を増やしてもらいたい。

- オスモ・ヴァンスカ (指揮)
- ミハエル・プレトニョフ (p)
- マレイ・ペライア (p)
- アンネ=ゾフィー・ムター (vn)
- マティアス・ゲルネ (Br)



第27位 アンネ=ゾフィー・ムター (vn) ©Bastian Achard